

【講演会】

見えない「もののけ」を描く

——鬼・妖怪・幽霊をめぐる——

国際日本文化研究センター所長 小 松 和 彦

日本人の想像力を探る

こんにちは。ただいま紹介していただきました小松和彦と申します。講演タイトルは、最初は『「もののけ」を描く』としたのですが、「もののけ」は本来見えない存在なので、この点をもう少し強調したいと思い、このように、『見えない「もののけ」を描く』というタイトルに変えさせていただきました。じつは「もののけ」という語も、もともと広い意味の「もの」という語に変えた方がいいのかなと思いましたが、これはそのままにしてあります。

さて、私がこのようなタイトルの演題を掲げさせていたくのは、次のような理由です。私は長い間、民俗学や文

見えない「もののけ」を描く（小松）

化人類学の分野で民間信仰の勉強をやってきました。しかもその民間信仰の中でも特に、人々がどちらかといえば嫌う「悪霊」のたぐい、例えば、鬼であるとか疫病神であるとかいった、否定すべき超自然的存在の方に関心を寄せてきました。そのような研究の末に、「妖怪」というようなものにも出会い、さらには「妖怪学」などといった言葉を使いながら、その理解を深めてきたわけです。その過程で気付いたのは、日本人は、この見えないはずの悪霊のたぐいを早くから見えるように、つまり造形・絵画化してきた、ということでした。そこで、このような、見えないはずの鬼・妖怪・幽霊、つまり「もののけ」を、先祖はどのように絵画化したとかという意味で、今申し上げたよう

見えない「もののけ」を描く（小松）

な演題でお話しをさせていたかどうかということになったのでした。

柳田國男は、その著『一目小僧その他』のなかで、自らの学問的営為を、次のように述べています。「私の小さな野心は、これまで余程の廻り路をしなければ、遊びに行くことが出来なかつた不思議の園——この古く大きく美しい我々の公園に、新たな一つの入口をつけてみたいということとであります」と述べています。これにあやかつて、私の小さな野心を述べるならば、それは「古くまた興味深い日本人の思い描いてきた、見えない世界（異界）、見えない「もの」（神々や悪霊たち）の様子を覗き見ることである。ただし、私は宗教者ではないので、そのための方法は、そのような世界や「もの」を語り描いてきた資料を探し出し、それによってその世界・ものを明らかにし、ひいては日本人の想像力のあり方を明らかにすることにあり」ということになるでしょう。つまり、異界や悪霊・妖怪たちが、いかに語られ、いかに描かれてきたか、ということです。

「信貴山縁起絵巻」から生まれた疑問

見えないものを描くということは、見えない世界を覗き見るということでもあります。私たちは、そういうことに昔から非常に強い願望を持っており、その世界の様子を想像し、そしてそれを描いてきました。

お手元にレジュメを配布しておりますので、これからそのレジュメも参考にしながら話を進め、とところどころで画像も紹介してみようと思います。

そもその出発点は、私が修士論文で「信貴山縁起絵巻」を考察したことにあります。これは、今でもとても賑わっている大阪の南の方にある信貴山の朝護孫子寺のことを描いた絵巻なのですが、縁起とは名ばかりで——通常、寺社の縁起という寺社が建立されるに至った経緯を物語ったものなのですが——、話の本身は、この寺に住んでいる不思議な方術を使う命蓮というお坊さんの靈験譚を描いたものです。

この絵巻は、三巻から構成されているのですが、第一巻目では、空を飛び回って托鉢をする命蓮の鉢が、山崎の

長者の家の倉を信貴山に運んでいくという、奇想天外な、それ自体が一つのファンタジーみたいな物語が描かれています。第二巻目では、都に住んでいる延喜の帝・醍醐天皇



絵1 信貴山縁起絵巻

見えない「ものけ」を描く（小松）

の病気を命蓮が治す話が描かれています。第三巻目では、命蓮の姉にあたる尼僧が、信州から命蓮に会いにやってくる道行の様子が描かれています。

ここで重要なのは、第二巻目です。帝が病気で明日をも知れない身になったとき、帝の病気を治せる僧はいないものかと廷臣たちが相談した。信貴山にいる命蓮というお坊さんは、お鉢を飛ばすほどの力を持っているということなので、帝の病気を治す力ことができるのではないか、ということになって、信貴山に使者を送り、都まで来て、ご祈祷をしてくれ、と頼む。ところが、命蓮は、わざわざ都まで行く必要はない。山でご祈祷をすればすぐに治してやる、と言う。使者は、それでは帝の病が治ったとしても、どうしてあなたの祈祷によって治ったのがわかるのでしょうかと尋ねた。これに対して、命蓮は、帝の病気が治る時に、帝は、私が派遣した、剣を衣にした童子の姿を見るだろう、と教える。その後、帝は夢うつつの中で南の方からキラキラと光る童子がやって来るのを見る。そうしたら、あつという間に病気が快癒したという。

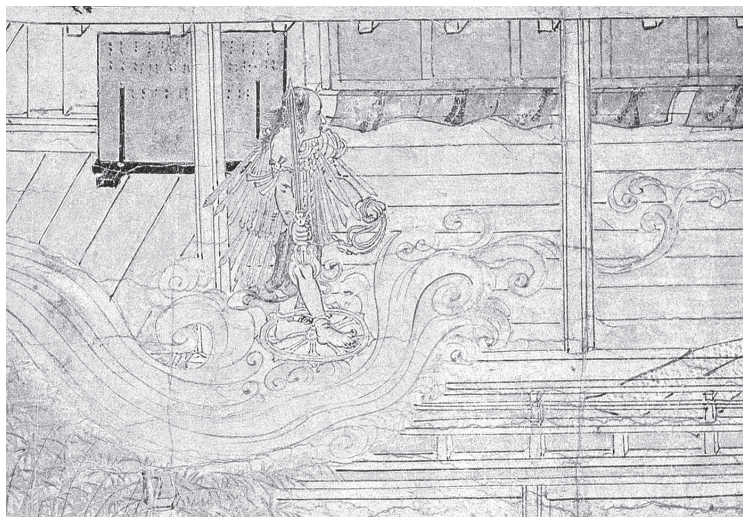
絵巻のその場面を見てみましょう。この場面（絵一）



絵2 信貴山縁起絵巻

は、剣の護法が、都の方に向かって空を疾走している場面です。このような護法は、通常、人には見えないとされているのですが、こうして描かれています。したがって、見えない護法を見えるようにした、貴重な画像といつていいかもしれません。次の場面は、偉い宮中大臣が控えていて、御簾の向こうに天皇がいると思われる、素っ気ない場面です（絵2）。そして、その次の場面には、また、護法童子が庭に、剣を手を持って降り立っている場面が描かれています（絵3）。

さて、この場面は、何を表しているのでしょうか？ 剣の護法は何をしているのでしょうか？ 帝は病気なのですから、この剣は病気の原因であるものを追い払おうとしている、と考えられます。病気の原因は、当時は「もののけ」と表現され、さまざまな悪霊のたぐいがある中身として想定されました。したがって、この場面は、剣の護法が「もののけ」を追い払う場面なのですが、肝心の「もののけ」は描かれていないのですね。「もののけ」も、通常、人には見えない存在とされていたので、描かれなくてもいいわけですが、しかし、やはり見えない存在である護



見えない「もののけ」を描く（小松）

絵3 信貴山縁起絵巻

法が描かれているのに、「もののけ」が描かれていないのはどうしてなのでしょう。

「もののけ」がここに描かれていない理由として、「もののけ」は帝に取り憑いているわけなので、その帝が御簾の向こうにいて描かれていないので、描かれないのが当然、という理由も考えられますし、絵師は「もののけ」のイメージをまだはつきりと掴んでいなかった、とも考えられますし、「もののけ」のイメージはちゃんと掴んでいたけれども、絵画化するのが怖かった、必要を感じなかった、とも考えられます。

描かれた「もののけ」を探し求めて

いずれにしても、この絵巻では「もののけ」は描かれていないのです。そこで、私がこの場面を見ながら思ったのは、もし「もののけ」が描かれたとしたら、どのような姿かたちをしていたのか。いま少し正確に言えば、この絵巻と同時代の絵画に「もののけ」を描いたものがあるのか、時代を下った絵画には「もののけ」を描いたものがあるのか、あるとすれば、それはどのような姿かたちをしていた

見えない「もののけ」を描く（小松）

のか、という疑問でした。こうして、私は絵画化された「もののけ」を探し求めるといふ研究を始めることになったわけです。この探究は、とてもたいへんな作業でしたが、絵巻をたくさん見ているうちに、もしも剣の護法が追い払った「もののけ」を絵画化すれば、このような姿かたちで描かれたのではないか、と思われるような画像を発見しました。これからその画像を紹介してみようと思います。

ところで、病気の原因とみなされた「もののけ」を剣で追い払う、命蓮が使役する護法童子は、命蓮に限らず、密教系の祈祷師つまり「験者」と呼ばれる僧たちに付き従っていたとされています。また、ここで留意しておきたいのは、この護法と同様の役割をもった、「式神」という超自然的な存在が、近年、映画やコミックで取り上げられて有名になった陰陽道の専門家である陰陽師にも付き従っていた、ということ。つまり、陰陽師に病氣治しの祈祷を頼むと、陰陽師は彼が使役する式神をつかって「もののけ」を追い払うことができる、と考えていたのです。したがって、描かれた「もののけ」を探すためには、こうした

祈祷師たちを描いた画像を探すことが重要になってきます。

ここで、日本の見えない世界の覗き方、探り方について、どのような方法があったかを整理しておきたいと思えます

類型1 「もの」（神や悪霊の類）の意思や見えない世界の様子を占いによって知る。

類型2 「もの」が人へ乗り移って、人の口（託宣）を借りて語る。

類型3 現実の世界や夢のなかに、見えないはずの「もの」が登場する。

類型4 実際にあるいは夢を通じて異界を訪問し、「もの」に出会う。

類型5 姿が見えない異界の「もの」が語りあっているのを、盗み聞きする。

私の考えでは、こうした状況を描いた絵画に、ひよっとしたら、「もののけ」あるいは「妖怪」の類が描き込まれ



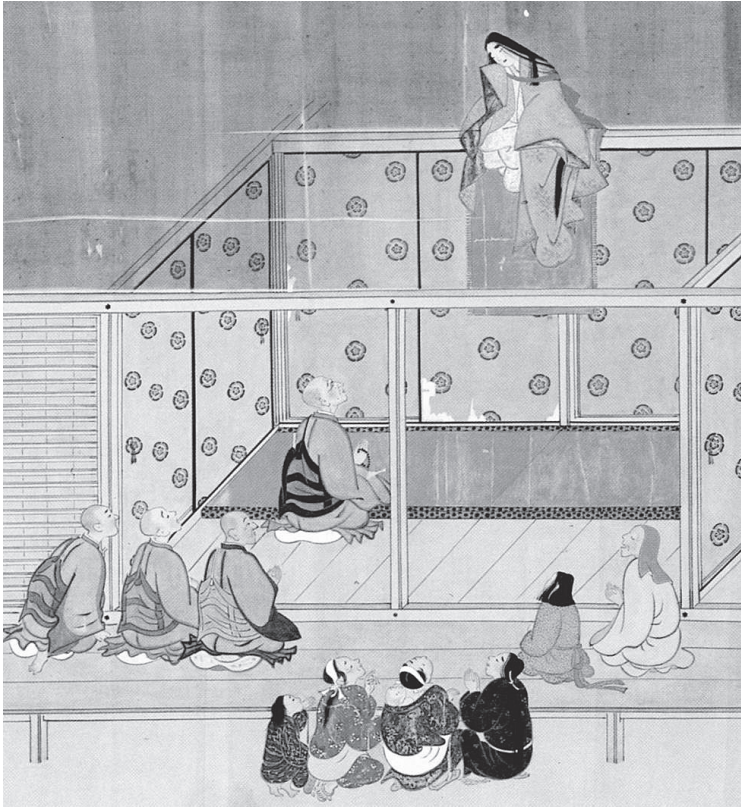
見えない「もののけ」を描く（小松）

絵4 比良天満宮縁起絵巻

ている可能性があるのではないか、と思うのです。そこで、こうした場面を描いているものを、絵巻などから探してみました。とくに、「もの」が乗り移って託宣するという状況には、二つのタイプがあって、氏神のような好ましい神が乗り移る場合と、悪霊つまり「もののけ」が乗り移って託宣する場合があるので、そのような場面を描いた絵画を探すことで、絵画化された「もののけ」に出会える可能性があります。

まず、類型2の事例として、数枚の絵をみていただきます。これは、「比良天満宮縁起絵巻」の神がかりの場面です（絵4）。太郎丸に菅原道真の霊が憑依している様子が描かれています。これは、「春日権現験記絵巻」に描かれている、明恵上人の前で、橘氏の娘に春日権現が憑依している様子を描いたものです。この憑依はすさまじいもので、橘氏の娘は鴨居にのぼってそこに腰掛けています（絵5）。これは「松崎天神縁起絵巻」の一場面で、偽り言をした女に天神が憑依して託宣しているところです（絵6）。衣服が乱れていることから、この憑依もげしい様子がわかります。ただし、これらの場面には、憑依して

見えない「もののけ」を描く（小松）



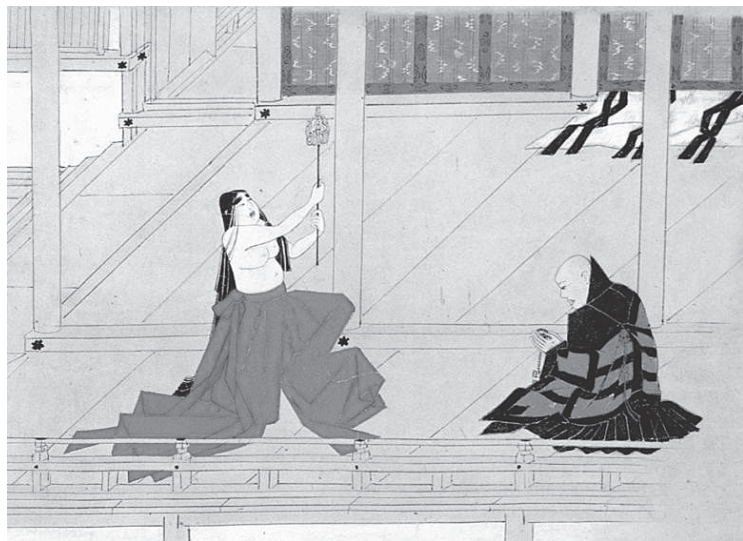
絵5 春日権現験記絵巻

いる神の姿は描かれていません。しかし、このように描かれた状況から、太郎丸や女に神が乗り移っているのだということは想像することができるとは思いません。

当時、「もののけ」を絵画化することはすでになされてきました。一三世紀初頭の制作とみなされている「北野天神縁起絵巻」には、紫宸殿に落雷して貴族に被害をもたらした雷神 \parallel 鬼の姿が描かれています。これは菅原道真の怨霊であるとも考えられていますし、重病におちいった藤原時平のもとで、三好清行の依頼で息子の浄蔵という僧が祈禱をしたところ、道真の怨霊が現れて祈禱を止めるよう託宣する場面では、時平の耳から蛇が這い出ていますが、この蛇は道真の怨霊 \parallel 「もののけ」を表しているのだと思われま（絵7）。

このように、丹念に絵巻の画像を検討

見えない「もののけ」を描く（小松）



絵6 松崎天神縁起絵巻



絵7 北野天神縁起絵巻

見えない「もののけ」を描く（小松）

していくと、早くから「もののけ」の絵画化がなされていたらしいということがわかってきます。

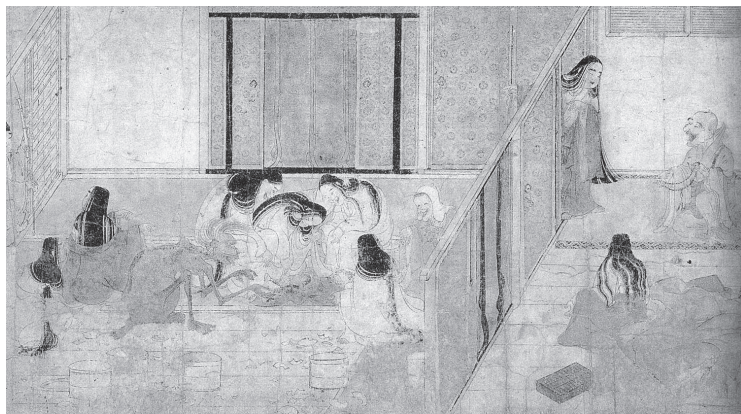
浄蔵の祈禱の場面については、かつて興味深い存在が描かれていたということを指摘したことがあります。それは怨霊の託宣が耳から頭を出した蛇の託宣として描かれているのですが、じつはその託宣は依坐の口を借りてなされたらしいのです。画面では、その依坐は、画面の左下、浄蔵の脇の帷に囲まれた二人の女のいずれかであると思われるます。つまり、依坐が語る怨霊の託宣の場面が、時平に乗り移った怨霊「もののけ」蛇として描かれているわけなのです。

こうしたことをふまえると、とてもよく理解できるのが、出産を描いた場面です。例えば、『紫式部日記』の冒頭の中宮彰子が一条天皇を出産する場面では、出産を妨害する「もののけ」を退散させるために、たくさんの僧が祈禱に招かれています。したがって、出産の場面を絵画化しようとしたとき、出産をする女とともに、こうした依坐、さらには「もののけ」さえも描かれている可能性があるかと推測できるわけです。そこで、絵巻のなかに描かれた出産

を探してみると、例えば、「餓鬼草子」（一二三世紀）にも、出産の場面があるが、それをよく見ると、産婦の近くに這い寄る「もののけ」（「鬼」）が描かれているとともに、戸で隔てられた右側の部屋では、依坐と思われる女と祈禱をする僧が描かれておりました（絵8）。また、同様の場面は、時代が下ったものですが、足利義尚本と呼ばれている「融通念仏縁起絵巻」（一五世紀）にも見出されます（絵9）。これは牛飼童の妻が難産で苦しんでいる場面を描いたものですが、中央に産婦がおり、その後方に産婦を苦しめている「もののけ」を描いたものと思われる赤い肌の鬼が、そして産婦の右側、別室では烏帽子をかぶった陰陽師らしい男が依坐と思われる女の前で祈禱をしている様子が描かれています。

あまり知られていないのですが、目にみえないとされていた「もののけ」は、一三世紀頃にはもうすでに絵画化され、しかもそれらの事例から判断する限りでは、「鬼」の姿で描くことが多かったようです。

見えない「もののけ」を描く（小松）



絵8 餓鬼草子



絵9 融通念仏縁起絵巻

見えない「もののけ」を描く（小松）

「もののけ」と「護法」もしくは「式神」

絵巻に描かれた数場面から、もう本題に入り込んできました。そこで、さらに進んで、最初の方で述べた、「もののけ」を追い払う護法の問題に戻ってみたいと思います。「信貴山縁起絵巻」には、命蓮の護法は描かれていませんが、それが追い払う「もののけ」は描かれていませんでした。しかし、もしその「もののけ」を描いたとすれば、絵8や絵9に描かれているような「鬼」であった可能性がきわめて高いのではないのでしょうか。

そのことを示唆するのが、例えば、次の事例です。これは、「現実の世界や夢のなかに、見えないはずの「もの」が登場する」という類型3に相当します。

ここで一つ具体的な例を挙げて考えてみましょう。「宇治拾遺物語」に、次のような話が載っています。

極楽寺は堀川の太政大臣藤原基経が造った寺である。その基経は重病になった。さまざまな祈祷をしたがいっこうに良くならない。ところが、なぜか極楽寺の僧には祈祷のために参上せよとの命がなかった。この時、基経への恩義

を思っていたある僧が、仁王経を奉じて勝手に参上し、中門の廊下の隅で仁王経を一心に誦経していた。殿が「ここに極楽寺の僧が来ていたら、ここに呼べ」と申したので、この僧を探し出して伺候させた。殿の様子はこのうえなく健康そうであった。殿は、なぜ極楽寺の僧を呼んだのかを、次のように語った。寝ていて夢を見た。その夢のなかで、恐ろしい格好をした鬼たちが、私の体をいろいろと打ち責めていた。その時、みずらを結った童子が、杖をもって中門の方から入ってきて、その杖でこの鬼たちを打ち払うと、鬼たちはみな逃げ散ってしまった。そこで、この童子に「お前は何者か」と尋ねたところ、「自分は、中門の脇で、殿のために仁王経を唱えている極楽寺の僧の護法である」と答えた。すると、夢からさめて、それから気分がよくなった。だから、そのお礼が言いたくて、こうしてこの僧を呼んだのだ、と説明した。

この話は、「現実の世界や夢のなかに、見えないはずの「もの」が登場する」パターンの話で、先に挙げた「信貴山縁起絵巻」に描かれた延喜の帝の病を治す命蓮の護法の話と、とても似ております。ただし、延喜の帝は剣の護法

しか目撃していませんが、この話では、極楽寺の僧の護法が基経の病気の原因である鬼「もののけ」を杖で追いついており、それを基経は目撃しているのです。

そこで、私は、次のようなことを想像してみたくなりました。もし当時の絵師がこの極楽寺の僧の護法が基経の身体を責めている鬼「もののけ」を追い払っている場面を絵画化したらどのようなものになるのだろうか。私の頭のなかにはそのイメージが浮かんでくるのですが、そのイメージと絵師のイメージは同じなのか、それともまったく違うのか、と。

すでに見たように、その「もののけ」は「鬼」のイメージとして私の頭のなかで想起できるわけですが、それを実証的に、つまり具体的な事例によって、確かめる必要があります。じつは、そのイメージにドンピシャの画像があるのですが、これは時代がかなり下った絵ですので、その紹介は後にして、ちょっと遠回りですが、古い時代の画像から迫ってみることにしましょう。

その手がかりは、三井寺の泣不動の縁起を語った一四世紀頃の制作である「不動利益縁起」とか「泣不動縁起絵巻」と題されている絵巻にありました。これは、三井寺の

見えない「もののけ」を描く（小松）

高僧智興が重病になり、その寿命を安倍晴明に占ってもらったところ、もはや寿命は尽きる運命にあるので、祈禱で病気を治すことができない。ただし、その寿命を誰かに移し替えることで智興の寿命を延ばすことができるという。そこで若い弟子の証空が身代わりとなることを申し出る。ところが、身代わりとなって閻魔宮に赴くことになった証空の守り本尊であった画像の不動明王が、これに涙を流して感動し、この不動が証空の身代わりとなって閻魔宮に赴いた、という話です。

私が注目するのは、智興が病の床に伏しており、その脇で安倍晴明が命の移し替えの祈禱をするという様子を描いた数場面です（絵10）。そこには、祈禱僧に従う護法に相当する「式神」が描かれており、しかもその場面の一つには、この式神が空中で智興に乗り移っているとされた「もののけ」を追い払っている様子が描かれています（絵11）。ここに描かれている「もののけ」は、典型的鬼の姿ではなく、やせ細った異形の者であって、しいていえば上述の「餓鬼草子」に描かれた「もののけ」のイメージに近いようです。

見えない「もののけ」を描く（小松）



絵10 泣不動縁起絵巻



絵11 泣不動縁起絵巻



絵12 泣不動縁起絵巻

さて、私が頭のなかで思い描いていたイメージが、具体的な画像を通じてだんだんはっきりしたのになってきたようです。「信貴山縁起絵巻」の絵師の頭のなかにあった「もののけ」のイメージは、きつとこうしたイメージだったのではないのでしょうか。おそらく絵師は、すでにこうした「もののけ」のイメージを具体的にもっていたにちがいないありません。しかしながら、絵にはしなかったのではないのでしょうか。

「百鬼夜行」の絵画化

ところで、この「不動利益縁起絵巻」には、妖怪を研究する者にとって見逃せない「もののけ」が別の場面に描かれています（絵12）。家の外で火を焚き、祭壇を組んで祈禱をしている場面です。これも智興のための祈禱の様子を描いているのですが、ここには、清明の脇に「式神」が描かれるとともに、祭壇の向こう側に「異形の者たち」を描き込んでいます。これも間違いない智興に乗り移っている「もののけ」と思われるのですが、この異形の者は上述の「式神」に追われる「もののけ」とは姿かたちが異なっ

見えない「もののけ」を描く（小松）

ています。この絵巻の絵師はまた、こうした姿かたちをした「もののけ」も想像していたのです。

これはいつたいたいどのような「もののけ」なのでしょう。これは当時「百鬼夜行」と総称されていた、多様な鬼を描いているのであろうと思われる。「今昔物語集」や「宇治拾遺物語」には、夜中に歩くと、鬼が群行しているところに遭遇するという話がたくさん載っています。「百鬼夜行」とはその群行からきた語なのですが、ここでいう「百鬼」とはたくさん鬼という意味ではなく、たくさん種類の鬼という意味も込められており、「手が三つ、足が一つ、目が一つの鬼」とか「手足が多数の鬼」「獣の鬼」「馬面の鬼」「牛面の鬼」「鳥の頭をした鬼」「赤い肌の鬼」「黒い肌の鬼」「禿頭の鬼」など、多様な姿かたちをしていた、と語られています。推測するに、「不動利益縁起絵巻」の絵師は、智興に乗り移った「もののけ」として、こうした多様な鬼つまり「百鬼夜行」を意識して、それを物語るためにわずか五体ですが、姿かたちが異なる鬼を描いたようなのです。

ところで、この五体の異形の鬼たちは、じつは私たち妖

見えない「もののけ」を描く（小松）

怪研究者にとってはきわめて重要な画像です。というのは、ここからその後の妖怪たちが生み出されたとも言えるからです。

たしかに、一見したところでは、一方では「餓鬼のような鬼」、他方では「さまざまな異形な鬼」の描写は、矛盾しているかに見えます。しかしながら、絵師の頭のなかではけっして矛盾していなかったはずで、というのは、絵師は、五体の異形の鬼を描くことで、鬼の正体、「もののけ」の正体を暗示させようとしていたからです。

「餓鬼草子絵巻」の鬼や「融通念仏絵巻」の鬼は、それが「もののけ」であり、一見して「鬼」の姿をしていることとはわかります。しかしながら、これらの「鬼」はその正体がわかりません。「もののけ」とは病気をもたらす邪悪な霊の総称であり、その典型的な姿なのであって、その「鬼」＝「もののけ」の正体を明らかにしていません。そのような「鬼」にはじつは鬼になった由来があったはずで、すなわち、その「鬼」はもとは誰その死霊であった、誰その生霊であった、どこそこの牛の霊であった云々といった「正体」が託されています。そのような

「鬼」の由来を少しでも絵画によって示そうとしたのが、「多様な異形の鬼」であったのです。つまり、正体を暗示されるような鬼が、「五体の異形の者」だったので。よく見ると、五体のうちの二体は、五徳と角たらいの道具の妖怪です。鳥の頭の鬼は、正体が鳥の妖怪なのではないでしょうか。こうした多様な鬼も、おそらく年を経るに従って、もとの属性を失って、一見しただけではもはや由緒がわからない典型的な鬼の姿になっていったのではないでしょう。

「つくも神」の流行と妖怪文化の新しい展開

じつは、このことを物語る絵巻が存在しているのです。それが、時代が下った一六世紀頃の制作の「つくも神絵巻」です。これは、古道具も百年経てば自分の力で化ける能力を獲得するというので、年末の大掃除の時に、古道具は百年経つ前に捨てられていた。しかも、なんら感謝の念もなく無造作に捨てられたので、捨てられた道具たちがこれに怒って、なんとか人間どもに復讐をしようと思集まり、知恵を絞って、ついに鬼となる能力を獲得したのであつ

た。鬼となった道具の精たちは、都に出て人をさらっては遊興にふけていたが、鬼の横行に頭を悩ました帝や貴族が、高僧たちに、鬼を追い払うための祈祷を依頼した。高僧の祈祷で発動した護法童子たちが、鬼たちを探し出してこれを責め立てたので、ついに鬼も降参し、それまでの悪行を反省し、仏門に入って修行を積み、ついには仏のなった、という話です。こうした道具の妖怪を、ここでは「つくも神」と呼んでおり、この「つくも」は「九十九」という意味で、「百歳に一歳足りない道具の精」ということを表しています。

このような絵物語を眺めて、興味深く思うのは、物語が進行するにつれて、古道具の姿かたちが徐々に変化していつていることです。最初はまったくの道具の姿だったのですが、徐々にそれに目鼻や手足がつきだします（絵13）。さらに物語が進行すると、その身体から道具であった痕跡が失せて互いに似通った鬼の姿になってしまっているのです（絵14）。

先ほど、「不動利益縁起絵巻」の清明の二つの祈祷場面に描かれた「もののけ」が違っていることのわけを説明し

見えない「もののけ」を描く（小松）

ました。一方は「もののけ」の出自・属性を表し、もう一方はそれをもはや失ったかたちでの表象である、と。その可能性が、この絵巻によって証明されたわけです。すなわち、恨みをいだくさまざまな事物の精は、定型化された鬼の姿かたちになるまでの一段階として、事物の属性と鬼の属性を合わせもったような姿かたちの段階をもつのです。

ところで、この絵巻に従うならば、「つくも神」とは、鬼となった古道具の精のことなのですが、この時代つまり室町時代に、妖怪文化史の大変化が起こります。というのは、この定型化された鬼の姿へと変貌していく一過程であった、つまり道具という出自・属性を保った状態の鬼の姿かたちが脚光を浴びることになったからです。

この時代になると、たくさんの異形の者たちの行列や宴の様子を描いた絵巻である「百鬼夜行絵巻」が制作されるようになるのですが、そこに描かれた異形の者たちの大半が、こうした過渡期状態の姿かたちをした古道具たちであったからです（絵15）。つまり、この絵巻での「百鬼夜行」とはおおむね「古道具」の妖怪を意味していました。そして、この時代以降は、「つくも神」といえば、こうし

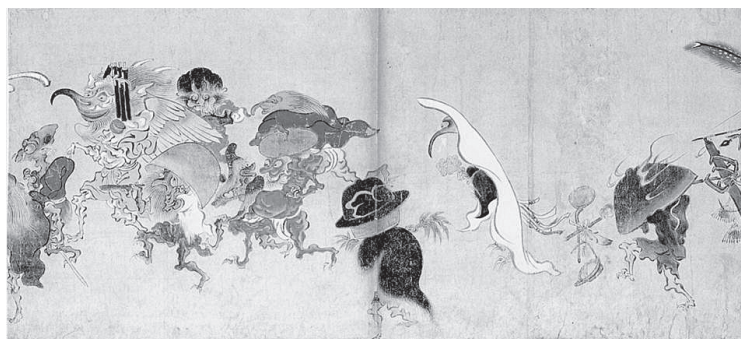
見えない「もののけ」を描く（小松）



絵13 附喪神絵巻



絵14 附喪神絵巻



絵15 百鬼夜行絵巻

た道具の妖怪を指すようになっていきました。言いかえれば、この時代から、道具の妖怪は定型化された鬼へ姿かたちを変貌することを止め、道具の属性を保ったままの妖怪として活躍することになったのです。もちろん、こうした妖怪たちも、平安時代ならば「もののけ」として括られるものであったと言えるでしょう。

古道具の妖怪「つくも神」の登場は、妖怪文化史に与えた影響がまことに大きいものがありました。というのは、これによって、妖怪の種目が急増することになったからです。わかりやすく言えば、私が使っているパソコンや車も妖怪化させることができるからです。道具の妖怪のことを強調しましたが、もちろん、こうしたことは、動物や植物などの自然物についても言えることです。そのような観念が芽生えていたことは、「不動利益縁起絵巻」に描かれていた「五体の鬼」からもわかります。しかし、自然物は人間が作ったものではありません。古道具の妖怪は、人間が次々に生み出すものをも妖怪化するという点で、画期的であつたのです。

見えない「もののけ」を描く（小松）

見出された答え

さて、ようやくここでの話題の結論みたいなことを述べる段階に至りました。見えない「もののけ」を日本人はどのように絵画化してきたのかということを探ってきたわけですが、当初「もののけ」は「鬼」の姿をしていると見なされ、「鬼」の姿を描くことで絵画表象されたのですが、同時にそうした「鬼」が発生した原因である自然物や人工物の属性をも保つかたちでも表象されていました。そしてその延長上に、今日の多様な妖怪たちが生み出されたのでした。言いかえれば、妖怪の起源は「もののけ」||「鬼」の信仰に求められるのです。

ここで、これまでの考察で解答を留保してきた問題について答えを与えてみたいと思います。私は「信貴山縁起絵巻」で重病におちいつている延喜の帝を治すために派遣された「剣の護法」の絵画化された姿を見ました。この絵画化は、帝の病気を外側から描くというものでした。ただし、そこには病気の原因である「もののけ」は描かれていませんでした。そこでもし「もののけ」を描いたらどのよ

見えない「もののけ」を描く（小松）



絵16 付喪神絵巻

うに描かれるかを想像し、それを絵画化した場面を推測させる画像として「餓鬼草子絵巻」や「融通念仏縁起絵巻」の出産の場面、「北野天神縁起絵巻」の浄蔵の祈禱場面、「不動利益縁起絵巻」の清明の祈禱場面などを挙げました。これによって、私たちは、見えない「もののけ」が見える「もののけ」になっていったことを確認したのですが、私はさらにふみこんで、「もののけ」に憑かれている病人が、夢うつつのなかで、「護法」が「もののけ」を追い払っている状況を目撃した様子を絵画化したらどのような描かれるかという想像もしました。その様子を語るのが「宇治拾遺物語」の藤原基経の夢でした。基経の身体を打ちさいなむ鬼たち、その鬼を追い払うために出現した護法。その答えがありました。それは「つくも神絵巻」の一場面、すなわち高僧が派遣した護法たちが、鬼たちを攻撃し追い払っている場面です（絵16）。「宇治拾遺物語」の時代と「つくも神絵巻」に時代はかなり離れていますが、おそらく基経が夢で見た光景は、このような光景であったのではないのでしょうか。たしかに、平安時代末から鎌倉時代の「百鬼夜行」は多様な姿をしていましたので、「ものの

け」―「鬼」の姿が「定型化された鬼」とは限らないのですが、同時代の「餓鬼草子」の鬼や「春日権現験記絵巻」などの病気の原因としての「もののけ」―「鬼」は、多くの場合、「定型化された鬼」として描かれていましたので、そうした「鬼」を目撃したとみなすのが妥当のようです。さらにもう一つ留意すべき点を指摘すれば、「憑依―祈祷」といった場面を描いていたのに対して、「つくも神絵巻」では、そうした枠組みが消滅しているということですから、ようするに、妖怪退治譚になっているのです。前者から後者が生み出されたともいつていいのかもしれませんが。

「鬼」から「幽霊」へ

以上で、ここで私が設定した議論は終わるのですが、以下で少し余談めいたことをお話ししたいと思います。「怨霊」の「憑依」から「幽霊」への移行に関する話です。「死霊解脱物語聞書」という本が、元禄三年（一六九〇）に出版され、人気を博しました。これは、死霊が人々を苦しめた末に、成仏（解脱）するという出来事を記録したものです。

見えない「もののけ」を描く（小松）

この死霊を成仏させたのが祐天という浄土宗の僧であったので、祐天上人霊験記とでもいいうべき話でもあります。

その内容は、次のようなものです。下総国（現茨城県）岡田郡の羽生村に、累という醜い女の人がいた。この女は、親譲りの田畑を持っていたので、その田畑に目が眩んだ男が累の婿になってその家に入った。入り婿となった男の名は与右衛門という。しかし、この累という女は顔が醜いだけではなく、心もねじ曲がった女だったので、きつと累にいじめられることが多かったでしょう、入り婿の与右衛門は、耐えられなくなつて、密かに累を殺そうと考え、夫婦が畑仕事を終えて帰ってきた夕方、鬼怒川のそばに差し掛かった時、累を川の中に突き落として、喉を絞めて殺してしまふ。与右衛門は累の死体を同村の浄土宗の法蔵寺というお寺に運んで埋葬しました。

その後、与右衛門は妻を次々にもらつたが、なぜか次々に死んで、ようやく六人目の妻に子供が産まれたので、菊と名づけた。この一人娘の菊が一三歳になったとき、与右衛門は菊に婿を取つた。ところが新婚早々の正月に、この菊が病気になつて寝込んでしまい、やがて、菊が口から泡

見えない「もののけ」を描く（小松）

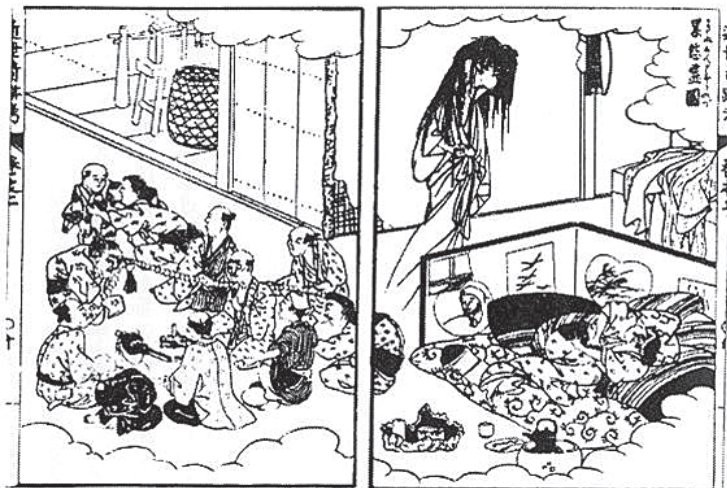


絵17 法蔵寺曼荼羅

を吹き出し、与右衛門に向かつて、「私は菊ではない。私は累だ。お前に殺された累だ。二六年前に鬼怒川で私をよくも殺したな。こうして、地獄から逃げ帰ってきて、お前に復讐するのだ」と菊の体を借りてしゃべりだしたので。村の人達は、何とか累に霊を鎮めなければいけない、ということになり、この村の近くのお寺に来ていた祐天上人に祈禱をお願し、その効果があつて、累の霊は成仏し、菊の病氣もいったんは終熄します。

ところが、しばらくして、菊がまた病氣になり、またもわけのわからないことを口走りだした。そこで再び祐天上人を招いて祈禱してもらつたところ、出てきた霊は、累の霊ではなく、六一年前に、累の祖父が他村から娶つた女には助という名の連れ子があつたのだが、邪魔に思つて、この子を殺していたのであつた。今度は、この助の霊が出てきたのであつた。これもまた祐天上人は鎮めた。

さて、この話は、これまでの検討に照らし合わせて整理すれば、菊の身体に「もののけ」が乗り移り、その「もののけ」の正体（出自）が、「累」と「助」の死霊（怨霊）であつた、ということになります。



山東京伝『近世奇跡考』より「菊に憑いた累の霊」

絵18 「近世奇跡考」より

見えない「もののけ」を描く（小松）

また、これまでの検討に照らすと、この「もののけ」（累と助の霊）は、僧の祈祷によって発動した「護法」や「式神」によって追い払った、というふうには語られてもいはいはずなのですが、この祐天上人は浄土宗の僧であったので、「六字名号」つまり「南無阿弥陀仏」という言葉の力で怨霊を成仏させています。

さて、そこで、この「もののけ」の憑依の場面を絵画化したならば、つまり「もののけ」を絵画化したならば、どのように描かれるのだろうか、という疑問が湧いてきます。これまでの検討に照らすならば、この「もののけ」は「定型化された鬼」として描かれるべきかもしれません。鬼化した累の怨霊、鬼化した助の怨霊です。

幸いにも、この疑問に答えてくれる絵が、この時代に描かれていました（絵17、絵18）。それを見ると、「鬼」の面影を多少は引きずっている絵柄もありますが、寝込んでいる菊の側にいるのは、「生前の姿」もしくは「経帷子を着了た姿」（埋葬したときに着物）の累や助の姿です。おそらくこれは菊が夢うつつで目撃した光景を表しているのでしょう。これによって、江戸時代では、「もののけ」＝「定

見えない「もののけ」を描く（小松）

型化された鬼」とする観念が大きく後退していることがわかります。では、それに代わって台頭してきたのは、何でしょうか。「もののけ」を「生前の姿」もしくは「経帷子を着た姿」（埋葬したときに着物）で描くということのようですが、これは、「幽霊」の描写にほかなりません。ただし、この絵画化は、菊の身体に憑依している「もののけ」の絵画化なのです。

この「憑依」という信仰的な基盤を取り除いた時に、今日私たちが考える「幽霊」が誕生するといっているのではないかと思います。これは、「憑依―祈祷」という状況を絵画化するにあたって、通常は見えない世界での「もののけ」を見えない「護法」が追い払っているのだという信仰的なイメージを絵画化し、その「憑依―祈祷」という信仰的基盤を取り除いた時に、「護法」による「鬼」（妖怪）退治譚が生まれたと同様のことだと思われまます。

この累の憑依事件に刺激されて、後に多くの幽霊譚・幽霊芝居が作られたと言われています。「新景累が洩」などはその典型かと思えます。

与えられた時間を過ぎておりますので、これで終わりに

いたしますが、「見えない『もののけ』を描く」と題して話を進めてきたわけですが、ここに至って、その福題として「鬼・妖怪・幽霊をめぐって」を添えさせていただいた趣旨がおわかりになったのではないのでしょうか。「鬼」「妖怪」「幽霊」は、じつは複雑に絡み合いながら、広い意味での妖怪文化史を構成してきたのです。つまり、現代のコミックやアニメなどサブカルチャーのなかに登場する多くの妖怪的キャラクターの祖先は、こうした文化伝統の延長として出てきたものなのです。

これで終わります。ご静聴ありがとうございました。

本稿は、二〇一二年一月九日、本学禅研究所主催の講演会で行なった講演録をもとに、加筆修正を加えたものです。